

広瀬百羅選『百人一句』

—手銭家所蔵資料紹介(一)—

佐々木 杏 里

(公益財団法人手銭記念館学芸員)

摘 要

手銭家蔵書の中から『百人一句』(広瀬百羅選)を紹介する。広瀬百羅は江戸時代中期の大社俳壇を導いた重要な人物であり、この資料は、百羅の俳諧に対する考え方を知る上で、重要な資料のひとつとなると考えられる。

キーワード・百羅 俳諧 百人一句 大社 手銭記念館

はじめに

今回紹介する資料は、手銭家に伝来する資料のひとつで、序文・本文ともに、百羅の自筆と考えて問題ない選句集である。無題だが、序文で百羅自身が「此百人一句」と述べていることから、本稿では『百人一句』を書名として用いることとした。

序文に続く本文は、半丁に一人ずつ、俳号(或いは姓名)を書き、その後、発句を三〜四行に分ち書きで記すという書き方で、合計百人の発句が記されている。

広瀬百羅(享保十六〜享和三(1731〜1803))が江戸期の大社俳壇において重要な存在であったことは、桑原規草氏の二冊の著書『出雲俳句史』(私家版、昭和12年9月・だるま堂書店、昭和53年4月)、『出雲俳壇の人々』(だるま堂書店、昭和56年8月)でも述べられ通説となっている。しかし、百羅から続く広瀬家三代が、どのような影響を大社俳壇にもたらしたのか、また、手銭家歴代といかに深い関わりを持っていたのかについては、ここ数年に亘る山陰研究プロジェクトによる調査、殊に一員としてご参加下さっている伊藤善隆氏のご研究、ご論考等によって、ようやく明らかになりつつあるところで、俳人としての百羅の全体像には、まだまだ不明な点が残されて

いる。とすればこの『百人一句』は、今後、百羅の俳諧に対する考え方や姿勢を考える上で、重要な資料のひとつとなると考えられる。

〈書誌〉

書型……仮綴じ一帖。袋綴じ。

表紙……共紙。

縦十九・二cm×横一五・〇cm。

題簽……なし。

序文……広瀬百羅(署名「百羅選」)。

字高……一五・〇cm(序「選ざる事ゝいへとも選は」を計測)。

跋文……なし。

丁数……全五三丁。

〈凡例〉

翻刻にあたっては、概ね通行の字体を用いた。

序文の改行は適宜改め、本文の発句は一句を一行に改めた。また、発句には私に通し番号を付した。

序文は原本の各丁片面の終わりに「」をつけ、()内にその丁数および表・裏(オ・ウ)を示した。

三丁表から始まる本文は、一句半丁であるため、丁数及び表裏は略した。

誤記かと思われる箇所も原文どおりに翻刻した。

〈翻刻〉

序

選ざる事かたしといへとも選は邪を棄て正をとる援筆の謂のよくしれる人はいかてか是を選せさゝんや和歌はよく(一オ)此義をしれとも俳諧はかつて此事を存せず古今俳家の人句をあつめて是を選と名るものは只一世一派を事として更に諸古諸流にわたらざる選のを(一ウ)もむきのおろそかなるにや俳諧かならず小狭なるものにあらず其門此流にかきりて他に及ざるは管見類ともいはんか愛すれとも其悪をしり憎めとも(二オ)其善をしるものは是此百人一句にして爰に百篇百様の变化自在をしるへきのみ
百羅選(二ウ)

1 菅相丞

たのしみやひさこのものゆふすゝみ

2 中納言定家

ちるはなを追かけて行あらしかな

3 大納言為世

糸さくら花の継からほころひぬ

4 平忠盛

いもか子のはふほとにこそ成にけれ

5 大徳寺一休和尚

目にたつや卯月八日の花競

6 鴨長明

櫛の山倒れしぬへき岩根哉

7 蛭川新右衛門親當

花芥子の無常すゝむるゆふへかな

8 宗祇法師

冬はなを奈良の習ひて朝茶かな

- 9 宗長
橋の香にせゝられて寝ぬ夜かな
- 10 宗養
墨の袖あらふてほしや天の川
- 11 心敬僧頭
紅葉する蓼やさなから唐にしき
- 12 牡丹花肖柏老人
空にしれ雨を望みの秋の雲
- 13 二位法印 細川玄旨
ふれかしの麦はあしくとはるのあめ
- 14 大納言光広
今朝むかふ東かゝみのもちゐかな
- 15 紹巴
梅の花香なからうつつ筆もかな
- 16 太閤秀吉公
小田原やおもひのまゝにかりおふせ
- 17 千利休
うくひすも笠着て出よ華の雨
- 18 小堀遠州
花のかけうき世に何とひちまくら
- 19 東山院
春風や麦に肥こへをくゑつとこな
- 20 靈元院法皇
寒念佛はかりにさむきあたま哉
- 21 伊勢上官守武

- 22 元朝や神世の事もおもはるゝ
山崎宗鑑
- 23 元日の見るものにせん富士の山
京 長頭丸貞徳
- 24 皆人のひる寝のたねや穂の月
江戸法眼 北村季吟
- 25 地主からは木の間の花の都かな
京 法橋維舟
- 26 秋や今朝一あしにする拭ひ縁
京 貞室老人
- 27 是はくとはかり花のよしの山
京 雛屋立圃
- 28 庭にさへ無な落葉はひがしやま
伊勢 勾当望一
- 29 をのつからうくひす籠や園の竹
大坂 西山翁宗因
- 30 朝ゆふの人もめすらしけふの春
芭蕉翁
- 31 ふるいけや蛙飛こむ水の音
江戸 北村湖春
- 32 名のつかぬ処かわゆし山さくら
大坂 西鶴
- 33 我恋の松しまもさそはつ霞
京 信徳
- 明月は豆腐売夜のはしめかな

- 34 京 言水
かすみけり日枝はあふみの山ならす
- 35 京 常矩
親の杖よわりし果や棚麻木
- 36 都水
行月に物のさわらぬ海辺哉
- 37 一品
松原に飛脚ちひさし雪の暮
- 38 立志
淀舟や喧嘩にまじるほとゝきす
- 39 大坂 来山
手も出さず物荷ひゆく冬野哉
- 40 京 如泉
枝わりて暮なは焚んさくらかり
- 41 江戸 素堂
月ひとつ柳ちり残る木間より
- 42 京 僧和及
都出てもはやかなしききぬた哉
- 43 伊丹 鬼貫
さひしさの急には見へぬすゝきかな
- 44 西武
銀もちのあたゝかそふに亥子かな
- 45 京 鷺水
かくはかりかハる姿やほしかふら
- 46 紀伊 三千風
- 47 此庵京へしらすなほとゝきす
大坂 才磨
- 48 朝顔はしハしの間にてうつくしや
江戸 其角
- 49 文月やひとりほしき娘の子
出雲 風水
- 50 夕暮の男鹿や角のあるものか
すて さよか
- 51 花をやる桜や夢のうき世もの
その
- 52 負ふた子に髪なふるらゝあつさ哉
せん
- 53 米かせはさむし雀のはねの音
かしく
- 54 狐よふ女猫にくしやのらこゝろ
江戸 花さき
- 55 男なき寢覚はこハひ蚊帳かな
とめ
- 56 我子なら供にはやらし夜の雪
豊後 りん
- 57 涼しさや髪ゆひ直す朝きけん
なか
- 58 たそかれのものとや団扇ひとへ帯
奥州
恋しなは我塚てなけほとゝきす

- 59 尼 芳樹
筆のさや焚てまつ夜のかやりかな
- 60 大津 尼智月
二つあらはいさかひやせんけふの月
- 61 尼 羽紅
又や見んいちこあからめ嵯峨の山
- 62 京 去来
岩端や爰にもひとり月の客
- 63 尾張 僧丈草
大原や蝶の出で舞ふおほろ月
- 64 江戸 嵐雪
出かハリや幼こゝろにもものあはれ
- 65 近江 曲翠
念入れて冬からつほむつはき哉
- 66 近江 許六
月雪にうれしかられし紙衣かな
- 67 近江 僧季由
乞食の事いふて寝る夜の雪
- 68 大津 木節
咲花もむつかしけなる老木哉
- 69 美濃 惟然
かなしさや麻木のはしもおとななみ
- 70 尾張 越人
おもしろや理屈はなしに花の雲
- 71 江戸 枕風
- 72 挑灯の空に詮なしほとゝきす
尾張 荷兮
木からしに二日の月の吹ちるか
- 73 江戸 桃隣
五月雨のいろや淀川大井川
- 74 京 凡兆
市中は物のにほひや夏の月
- 75 大津 正秀
日の岡やかかれてあつき牛の舌
- 76 京 杜国
吉野出て布子売おし衣更
- 77 江戸 嵐蘭
子や泣ん其子の母も蚊の喰ん
- 78 加賀 北枝
来る秋は風はかりてもなかりけり
- 79 伊勢 涼菟
来からしの日吹て居にけり
- 80 江戸 野坡
はき掃除してから椿ちりにけり
- 81 尾張 露川
くさかりの道くこほす野菊哉
- 82 江戸 利牛
賑やかな内を出て来る月見哉
- 83 近江 僧千那
高灯籠ひるは物うきはしら哉

- 84 琴風
猫の恋鼠もとらすあハれなり
- 85 江戸 孤屋
こうろきや箸て追やる膳のうへ
- 86 路通
いねく人と人にいハれつ年のくれ
- 87 大津 乙州
海山の鳥鳴立る雪吹哉
- 88 岩城 露沾
梅一木つれく草のすかた哉
- 89 近江 珍碩
いろくの名もむつかしや春の草
- 90 信濃 曾良
剃捨てくろかみ山に更衣
- 91 大津 尚白
むつかしや嵯峨にも置す虫の色
- 92 美濃 支考
恵心寺に奉公はせてあしろ守
- 93 呂丸
恠しまや物と、のひしけふの月
- 94 落梧
似た顔のあらは出て見ん一おとり
- 95 伊賀 土芳
おもしろふ恠笠燃ようす月夜
- 96 秋風

- 97 正月を馬鹿て暮して二月哉
大坂 之道
- 98 更衣雑巾ひとつ出にけり
専吟
- 99 せんとまで目の舞ふ谷も若葉哉
加賀 萬子
- 100 のむほとに三ヶ月かゝるさくら哉
伊勢 乙由
- 秋たつや野はまた夏の花ながら
- 〈考察〉
入集者と出典
- 百人の内訳を見ると、20・靈元院法皇までは歌人、連歌師らがほぼ時代順に並ぶ。その後には、室町俳諧、貞門、談林などの俳人が約四〇名、蕉門俳人が約四〇名続き、一応、序文で百羅が述べていた「一派一流に偏らない」という姿勢がうかがえる人選となっている。選ばれている蕉門俳人は、いずれも直接芭蕉に教えを受けた人ばかりで、宝暦七年(1757)歿の56・長野りん以外は皆、宝暦以前に亡くなっていることから、この年代をひとつの基準としたかもしれない。
- 次に、ベースとした句集等があったのかどうか調べてみると、『俳諧古選』(三宅嘯山編・宝暦三(1713)刊)、『誹諧温故集』(雷風菴蓮谷編・延享五(1748)刊)、『類題発句集』(五升庵蝶夢編・安永三(1774)刊)の三冊で、特に多くの句が重なっていた。

『俳諧古選』と重なる句は八十一句、『誹諧温故集』と重なる句は三十二句あり、特に、前半の歌人、連歌師らの句は、ほぼ『俳諧古選』（巻五「雑の部」）、または『誹諧温故集』（四序混雑）の入集句と重なっている。

『俳諧古選』、『誹諧温故集』両方に採られている句は二十九句あるが、語句に異なるのある十句については、いずれも『誹諧温故集』の句が採られていた。

これらのことから、『俳諧古選』、『誹諧温故集』の二冊が、選句の資料の土台となったのではないかと推測される。

一方、『類題発句集』と重なる句は四十三句あるが、これらはほとんど『俳諧古選』とも重なっている。ただし、13・細川玄旨（細川幽斎）、45・鷲水の二句は、『類題発句集』のみが、百羅選『百人一句』と一致していた。

次に、『俳諧古選』『誹諧温故集』のどちらにもない十六句が入集している句集等を調べた。

- 11・心敬 ↓ 犬子集（1633刊）※「無名」
- 33・信徳 ↓ 元禄百人一句（1691刊）、類題発句集（1774）
- 37・一品 ↓ 虚栗（1683刊）
- 58・奥州 ↓ 猿蓑（1691刊）
- 61・羽紅 ↓ 嵯峨日記（1753刊）
- 67・李由 ↓ 韻塞（1696刊）、類題発句集
- 79・涼菟 ↓ 伊勢新百韻（1698刊）、類題発句集
- 81・露川 ↓ 花虚木（1689刊）、風俗文選（1706?）
- 88・露沾 ↓ 炭俵（1694）
- 89・珍碩 ↓ ひさご 後刷本（1735刊）

広瀬百羅選『百人一句』―手銭家所蔵資料紹介（二）―（佐々木杏里）

- 90・曾良 ↓ 奥の細道（1694頃）
- 95・土芳 ↓ 猿蓑、類題発句集
- 100・乙由 ↓ 麦林集（1739序）
- 1・菅相丞 19・東山院 20・靈元院法皇 ↓ 不明

出典不明の句

11・心敬作となっている句は、初出と思われる『犬子集』では脇三句を宗祇、宗長が付けた無名句とされ、その後『綾錦』（享保十七（1732）刊）等では「仙吟作」となっており、心敬作となっている句集は確認できなかった。

1・菅相丞、19・東山院、20・靈元院法皇、の三句は、入集している句集を見つけないことができなかった。

1の句については、『鶉衣』（上・奈良団の賛「・・・ひさごがもとの夕すずみ―以下略―」横井也夕作・天明七（1787）刊）、『夢想兵衛物語』（後編巻之四「―西行上人の歌に、たのしみは夕がほ棚の下すゞみをとこはて、らに女は二布して―以下略―」滝沢馬琴作・文化七（1810）刊）などで引用されており、西行の作としてかなり人口に膾炙した歌と思われる。

また、20・靈元院法皇（承応三―享保十七（1654―1732）と、その皇子でもある19・東山院（延宝三―宝永六（1675―1709）は、芭蕉と同時代の著名な歌人である。和歌に精進していた百羅が（広瀬百羅追善集『あきのせみ』の「枕詞」に「歌道をもて母となせし」とある）、これら四人について詳しく知らなかったとは考えにくく、何らかの意図を持って作為的に入れた可能性も捨てきれない。

語句の異同

語句に異同あるものについて較べてみる。

(古)は『俳諧古選』、(温)は『誹諧温故集』

3・大納言為世

花の継から

↓花の継より (古)(温)『菟玖波集』

10・宗養

あらふてほしや

↓ほしの (古)(温)

12・牡丹花肖柏老人

空にしれ雨を望みの

↓空にしるや雨の望みの (古)(温)

13・二位法印 細川玄旨

ふれかしな『類題発句集』

↓よしやふれ (温)『玉海集』

18・小堀遠州

ひちまくら

↓ひさまくら (古)

22・山崎宗鑑

元日の (温)

↓元朝の (古)

40・如泉

枝わりて

↓枝わつて (古)

41・素堂

月ひとつ

↓月ひとり (古)

45・鷺水

かくはかり『類題発句集』

↓かく迄も (古)

61・羽紅

又や見ん

↓又や来ん『嵯峨日記』

66・許六

うれしかられし紙衣かな

↓淋しかられし紙子かな (古)『韻塞』

68・木節

咲花も

↓咲花を『続猿蓑』

↓花さくも (古)(類)

73・桃隣

大井川『故人続五百題』

↓大和川 (古)(炭俵)

81・露川

道〱こほす『風俗文選』

↓落とす『花虚木』

89・珍碩

名もむつかしや『ひさひ』後刷本』

↓まぎらわし『ひさひ』初刷本』他

雑巾ひとつ出にけり

↓雑巾ひとつ出来にけり (古) 『有磯海』

目の舞ふ (温)

↓舞た (古)

73・桃隣の句は、初出と思われる『炭俵』において「五月雨の色や淀川大和川」となっており、他の句集でも「大和川」ばかりだったので、「大井川」は単なる百羅の誤りかと思われた。しかし、百羅没後の刊行である『故人続五百題』（高梨一具編・文政十二（1829）刊）に「大井川」として載っており、百羅と一具とが同じ資料を参照した可能性も否定できない。

これを踏まえると、他のいくつかの語句の異同についても、単なる百羅の書写間違いではなく、何かしらの未出資料を参照していた可能性は完全には否定できなくなってきた。

まとめ

百羅が『百人一句』をいつ頃編んだのか。人選、選句の基準はどういうものだったのか。何を参照したのか。

多くの疑問が残ったままになったが、今後これらを明らかにしていく過程で、百羅の俳諧に対する考え方や姿勢だけでなく、当時の大社俳壇についてもさまざまな発見や理解の深化が期待できると考える。

(付記)

本稿作成にあたっては、湘北短期大学の伊藤善隆氏のご論考（『季硯句集『松葉日記』―手銭記念館所蔵俳諧資料(二)―』（『山陰研究』第六号、二〇一三年一月）、『翻刻・手銭記念館所蔵俳諧伝書(一)―手銭記念館所蔵俳諧資料(二)―』（『湘北紀要』三五号、二〇一四年三月）、『百羅追善集』あきのせみ―手銭記念館所蔵俳諧資料(三)―』（『山陰研究』第七号、二〇一四年一月）、『翻刻・手銭記念館所蔵俳諧伝書(二)―手銭記念館所蔵俳諧資料(四)―』（『湘北紀要』三六号、二〇一五年三月）、『俳諧史の中の出雲・大社・手銭家』（『平成26年度出雲文化活用プロジェクト報告書』）において助けられました。また、伊藤善隆氏、島根県立出雲歴史博物館の岡宏三氏に多大なご助力、ご助言をいただきました。記して感謝申し上げます。

本稿は、山陰研究プロジェクト「山陰地域文学関係資料の公開に関するプロジェクト」(二〇一三～二〇一五年度、研究代表者：野本瑠実)による研究成果の一部である。

『百人一句』掲載句の主な入集句集一覧 グレーの項は、語句に異同のある本

番号	名前	名前 2	俳諧 古選	誹諧 温故集	類題 発句集	その他入集句集	その他入集句集
1	菅相丞	菅原道真					
2	定家	藤原定家	○	○		菟玖波集	
3	為世	藤原為世	○	○		菟玖波集	
4	平忠盛		○			風俗文選	
5	一休和尚		○	○			
6	鴨長明		○	○		菟玖波集	犬子集
7	蜷川新右衛門		○	○			
8	宗祇法師		○	○			
9	宗長		○				
10	宗養	谷宗養	○	○			
11	心敬僧都					犬子集	綾錦
12	肖柏老人	牡丹花肖柏	○	○		春夢草	綾錦
13	細川玄旨	細川幽斎		○	○		
14	大納言光広	烏丸光広	○			鷹筑波	
15	紹巴		○	○			
16	太閤秀吉公	豊臣秀吉		○			
17	千利休		○	○		鷹筑波	
18	小堀遠州		○				
19	東山院	東山天皇					
20	靈元院法皇						
21	伊勢上官守武	荒木田守武	○	○	○		
22	山城宗鑑		○	○	○		
23	長頭丸貞徳	松永貞徳	○			犬子集	故人五百題
24	季吟	北村季吟	○		○	花千句	元禄百人一句
25	法橋維舟	松江重頼	○			名取川	
26	貞室老人	安原貞室	○	○	○	一本草	曠野
27	雛屋立圃	野々口立圃	○				
28	勾当望一	杉木望一	○			犬子集	
29	西山翁宗因		○		○	故人五百題	
30	芭蕉翁	松尾芭蕉	○			春の日	続故人五百題
31	湖春	北村湖春	○	○	○	故人五百題	
32	西鶴	井原西鶴	○	○		故人五百題	
33	信徳	伊藤信徳			○	元禄百人一句	
34	言水	池西言水	○		○	初心もと柏	
35	常矩	田中常矩	○		○	俳諧雑巾	
36	都水		○				
37	一晶	芳賀一晶				虚栗	
38	立忘	高井立志	○		○		
39	来山	小西来山	○				続故人五百題
40	如泉	斎藤如泉	○				
41	素堂	山口素堂	○				素堂句集
42	和及	三上(高村?) 和及	○		○	元禄百人一句	
43	鬼貫	上島鬼貫	○	○			
44	西武	山本西部	○			鷹筑波	
45	鷺水	青木鷺水	○		○		
46	三千風	大淀三千風	○				
47	才磨	椎本才磨	○		○		
48	其角	宝井其角	○	○		五元集拾遺	故人五百題
49	風水	日置風水	○				
50	すて		○	○		ばせおだらひ	玉藻集

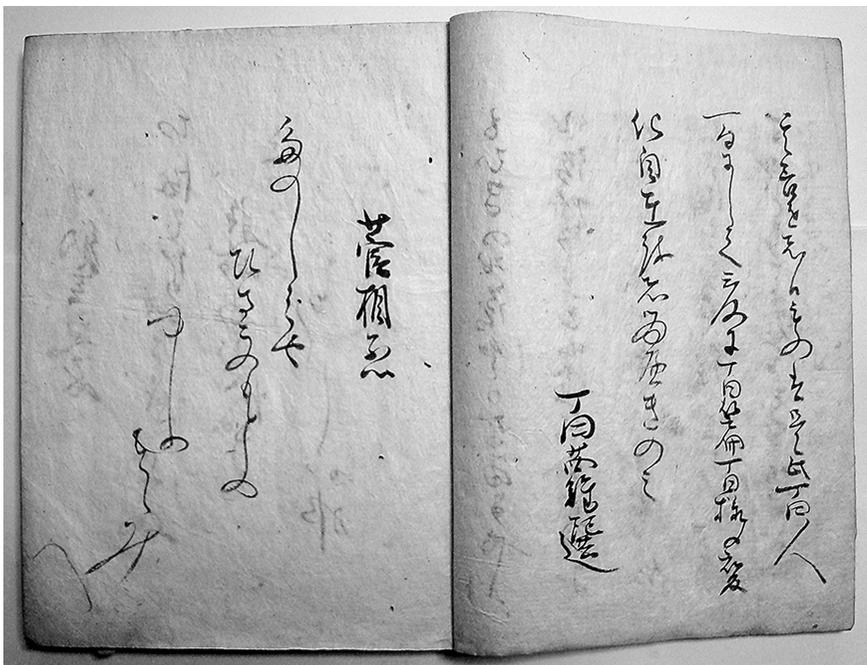
『百人一句』掲載句の主な入集句集一覧 グレーの項は、語句に異同のある本

番号	名前	名前 2	俳諧 古選	誹諧 温故集	類題 発句集	その他入集句集	その他入集句集
51	その	斯波園女	○	○	○	陸奥衛	玉藻集
52	せん		○			玉藻集	
53	かしく		○				
54	花さき		○		○	玉藻集	
55	とめ	野澤とめ(羽紅)	○	○		いつを昔	玉藻集
56	りん	長野りん	○			玉藻集	
57	なか		○			玉藻集	
58	奥州					猿蓑	玉藻集
59	芳樹		○		○	玉藻集	
60	智月	川井智月	○		○	続猿蓑	玉藻集
61	羽紅	野澤羽紅				嵯峨日記	
62	去来	向井去来	○		○	笈日記	故人五百題
63	丈草	内藤丈草	○		○	北の山	炭俵
64	嵐雪	服部嵐雪		○	○	猿蓑	玄峰集
65	曲翠	菅沼曲翠	○		○	炭俵	故人五百題
66	許六	森川許六	○		○	韻塞	
67	李由	河野李由			○	韻塞	故人五百題
68	木節	望月木節	○		○	続猿蓑	故人五百題
69	惟然	廣瀬惟然	○		○	続猿蓑	
70	越人	越智越人	○			曠野	
71	杵風	杉山杵風	○		○	炭俵	別座鋪
72	荷兮	山本荷兮	○	○	○	曠野	故人五百題
73	桃隣	天野桃隣	○		○	炭俵	故人続五百題
74	凡兆	野澤凡兆	○		○	猿蓑	故人五百題
75	正秀	水田正秀	○	○	○	猿蓑	故人五百題
76	杜国	坪井杜国	○			曠野	笈の小文
77	嵐蘭	松倉嵐蘭	○			猿蓑	本朝文選
78	北枝	立花北枝	○		○	炭俵	故人五百題
79	涼菟	岩田涼菟			○	伊勢新百韻	ねなし草
80	野坡	志田野坡	○		○	炭俵	
81	露川	澤露川				花虚木	風俗文選
82	利牛	池田利牛	○			有磯海	故人続五百題
83	千那	三上千那	○	○	○	猿蓑	故人五百題
84	琴風	梁川琴風	○	○	○		
85	孤屋	小泉孤屋	○		○	いつを昔	炭俵
86	路通	忌部路通	○	○	○	猿蓑	故人五百題
87	乙州	川井乙州	○		○	炭俵	故人五百題
88	露沾	内藤露沾				炭俵	故人続五百題
89	珍碩	浜田酒堂				ひさご(後刷)	元禄百人一句
90	曾良	河井曾良				奥の細道	
91	尚白	江左尚白	○	○		孤松	暁山集
92	支考	各務支考	○	○	○	白陀羅尼	故人五百題
93	呂丸	図司呂丸	○			三日月日記	
94	落梧	安川落梧	○		○	曠野	笈日記
95	土芳	服部土芳			○	猿蓑	
96	秋風	三井秋風	○	○			
97	之道	槐本之道	○			有磯海	
98	専吟	釈専吟	○	○	○	故人五百題	
99	萬子	生駒萬子	○			孤松	
100	乙由	中川乙由				麦林集	

広瀬百羅選『百人一句』—手錢家所蔵資料紹介(二)—(佐々木杏里)

〈参考図版〉

序文末尾・本文冒頭(3ウ・4才)



“Hyakunin Ikku”- reprint and introduction ; Documents of Tezen Family Archives (1)-

Anri Sasaki
(Tezen Museum curator)

[Abstract]

I will reprint and introduce “Hyakunin Ikku” from the Tezen Family Archives. Hirose Byakura is an important person who led the haiku at Taisha of the mid-Edo period . I think this article is one of the important materials in understanding the concept for the loitering of Byakura,

Key words : Byakura Haikai “Hyakunin Ikku” Taisha Tezen Museum